

平成20年度 第2回 宮城県食育推進会議議録

- 1 日時：平成21年3月23日（月）
- 2 場所：宮城県自治会館 200・201会議室
- 3 出席委員（敬称略）
杉崎博子、藤本由紀子、佐々木寿美子、三塚正宏、平塚捷幸、加藤房子、若生裕俊、
渋谷文枝、小田泰子、山本壽一、平本福子、畠山英子、佐藤れい子、千葉恵美、
渡辺政巳、山本あや、田原迫洋一
- 4 会議録

司会（健康推進課：横山技術補佐）

ただ今から、平成20年度第2回宮城県食育推進会議を開催致します。

当会議は、情報公開条例第19条の規定に基づき公開とさせていただきます。

それでは、会議開会に当たりまして、高橋保健福祉部次長から御挨拶させていただきます。

高橋保健福祉部次長

次長の高橋でございます。本日は、年度末も押し迫り大変お忙しいところ、御出席を賜りまして誠にありがとうございます。

また、日頃から委員の皆様には、県政の推進に御協力を頂いておりますことに、改めて感謝申し上げます。

本県の食育につきましては、平成18年に当食育推進会議で御審議賜りまして、策定いたしました食育推進プランに基づいて推進させていただいているところでございますが、計画期間も後期に入りまして、次期計画のあり方等も見据えながら、今後はより地域に密着した取組を進めていく必要があると考えております。

さて、食育に関する県の動きですが、宮城県食育推進プランの関連計画にもなっております「水産業の振興に関する基本的な計画」の改定作業を行ってまいりましたが、先般の県議会2月定例会におきまして計画の変更を御承認いただきました。改定後の計画によりますと、重点施策の柱の一つに新たに「食育推進への取り組み」を掲げるなど、食育の重要性に着目した内容となっております。

また、本県の食料自給率の向上に取り組むため、知事を本部長といたします「宮城県食料自給率向上推進本部」を設置いたしまして、本日第1回目の会議が午前中に行われましたが、食料自給率の向上に向けた行動計画を策定することとしております。

こうした動きも踏まえまして、今後とも関係部局が連携を強化しながら、本県の食育を積極的に推進して参りたいと考えておりますので、委員の皆様及び各所属団体の方々には、なお一層の御協力を賜りますようお願いいたします。

本日は、今年度の食育推進運動の取組の状況ですとか、「みやぎ食育アドバイザー」の設置などについて御報告させていただきますとともに、宮城県食育推進プランの計画後期に向けた食育推進の方向性などについて、各委員から御意見を頂戴したいと考えております。何とぞよろしくようお願いいたします。

以上、簡単ではございますが、開会に当たっての御挨拶とさせていただきます。よろしくようお願いいたします。

司会（健康推進課：横山技術補佐）

委員の方々の出欠状況ですが、宮城県歯科医師会の山本委員が若干遅れて参られる予定です。また、欠席の委員の方は、宮城県中学校長会の黒田委員と宮城県地域婦人団体連絡協議会の三浦委員、宮城県栄養士の竹内委員が所用により欠席となっております。

本日は、お手元に配布させていただいております会議次第に従い進めさせていただきます。

それでは、次第の3.報告事項に入らせていただきます。議事の進行につきましては、平本会長にお願い致します。

なお、本推進会議の議事録につきましては、後日公開とさせていただきますので御了

承願います。それでは、平本会長よろしくお願い致します。

議長（平本会長）

それでは、次第に従って参りたいと思います。

まず始めに、報告事項の(1)「食育推進運動の展開状況について」説明をお願いします。

事務局（健康推進課 日地谷主幹）

それでは「食育推進運動の展開状況」について御説明させていただきます。お手元の資料1を御覧願います。

まず、「みやぎ食育推進月間」に係る取組といたしまして、県庁2階において、食育普及のためのパネル展を開催したほか、月間中に市町村等で開催される食育に関連する各種イベント等の情報をホームページを活用して情報発信したほか、11月11日には、仙台市太白区文化センターを会場に、第2回食育推進県民大会を開催しております。お手元に配布しております「参考資料3」に県民大会の概要をまとめておりますので、後ほど御覧いただければと思います。

また、食育に積極的に取り組む個人や団体等を表彰する「みやぎ食育活動優良実践者表彰」につきましましては、最優秀賞1団体、優秀賞2団体、食育奨励賞1個人、1団体の計5名を選定し、食育推進県民大会において表彰式を行いました。受賞団体等については、資料に記載しておりますとおりです。

また、みやぎまるごとフェスティバルでの食育ブースの出展を始め、地方振興事務所や保健福祉事務所等において、各種シンポジウムやフォーラム等を開催しております。

3ページを御覧願います。「食生活指針や食事バランスガイド」の普及・啓発に係る取組といたしまして、県庁や地方合同庁舎食堂へ設置しております啓発用机上プレートや20年度から毎月発行しております「みやぎの食育通信」などを活用し、情報発信を行っております。

次に「はやね・はやおき・あさごはん推奨運動」につきましましては、小学1年生全員に「はやね・はやおき・あさごはん」のクリアファイルを配布したほか、「子育て応援団すこやか2008」や「みやぎまるごとフェスティバル」、「あさごはんコンテスト」等を通し、運動の推進を図りました。なお、「あさごはんコンテスト」の実施状況につきましましては、お手元に配布しております「参考資料4」にまとめておりますので、併せてお配りしておりますレシピ集とともに、後ほど御覧いただければと思います。

4ページを御覧願います。食の安全安心に係る取組として、「みやぎ食の安全安心取組宣言」を行った店舗や「食の安全安心消費者モニター」の増加に努めると共に、「食の安全安心セミナー」等を開催し、食の安全安心に係る啓発活動を行っております。また、県ホームページ「みやぎの食育」や「みやぎの食育通信」を活用し、食育の取組事例の紹介等を行いました。

次に、食育推進に関わるボランティアの育成については、昨年度に引き続き、「みやぎ食育コーディネーター」養成講座を開講し、47名の方々が修了しております。この結果、昨年度の修了者と合わせ、食育コーディネーターは104名となっております。

5ページを御覧願います。「みやぎ食育アドバイザー」の設置についてであります。この件につきましましては、次の報告事項で御説明申し上げます。次に、意欲ある食産業者の育成及び連携に係る取組として、新鮮で多彩な食材の良き理解者であり、生産時の「苦労」や生産者の「こだわり」などのみやぎの食材の想いを華麗な料理に添えてお届けする「みやぎ食材伝道士」の認定制度を創設し、今年度は二つ星3名、一つ星7名の料理人の方々を認定しております。

その他の取組といたしましては、6月の国の食育月間にちなみ、東北農政局と県が共同で「食育シンポジウム」を開催したほか、群馬県前橋市で開催された食育推進全国大会への宮城県ブースの出展などを行っております。

6ページを御覧下さい。平成19年度に県内7圏域に設置いたしました、食育推進連絡会議が主体となった各種イベントを開催しているほか、食育推進プランの周知・普及活動を行っております。

最後に、企業に御協力をいただきました取組と致しまして、平成19年度に実施した「あさごはんコンテスト」の受賞作品により作成いたしました「みやぎのおいしい！簡単あさごはんレシピ集」を、フレッシュフードモリヤ様において、17,400部増刷していただき、来店されたお客様への朝食の重要性に係る啓発活動を実施していただきました。以

上、長くなりましたが、「食育推進運動の展開状況」について御報告申し上げます。

議長（平本会長）

ただ今、事務局から「食育推進運動の展開状況」についての説明がありました。この件につきまして御質問等ございましたら、お願いいたします。

よろしいですか。

では、報告事項の(2)「みやぎ食育アドバイザー」についての説明をお願い致します。

事務局（健康推進課 日地谷主幹）

お手元の資料2を御覧願います。今回新設させていただきました「みやぎ食育アドバイザー」と平成19、20年度と養成して参りました「みやぎ食育コーディネーター」や食育に取り組んでおられます関係団体等を「みやぎ食育応援団」として整理させていただきました。

昨今、委員の皆さま及びその所属団体の方々の御尽力によりまして、市町村や各種団体等による食育活動が活発化してきております。その結果、各種フォーラムや講演会等が開催される機会も増えて参りました。

それに伴い、講演していただける講師の紹介依頼も増えてきておりますことなどから、地域での食育の取組が円滑に進むよう、市町村や各種団体等からの要請に応じて、深い学識や見識、専門的な知識に基づき、市町村食育推進計画の作成や各種事業の推進に対する助言、各種講演会やフォーラム等で講演などを行っていただける有識者の方々を「みやぎ食育アドバイザー」として登録させていただくものです。

現時点では、資料2の2枚目に記載しております7名の方々を登録させていただいております。本食育推進会議の委員からは、宮城学院女子大学の平本教授、東北福祉大学の畠山教授、スローフードジャパンの若生会長の御協力をいただいております。ありがとうございます。

今後「みやぎ食育アドバイザー」につきましては、随時増員してまいりますし、その活用について積極的に情報発信していきたいと考えております。以上です。

議長（平本会長）

ただ今、事務局から「みやぎ食育アドバイザー」について、説明がありました。何か質問等はございますか。

随時増やしていくというお考えですので、御推薦とかありましたら、事務局の方に御連絡よろしくをお願いいたします。

では、続きまして、次第4の協議事項に入ります。協議題の思春期後期から青年期に対する働き掛け方策について、事務局から説明をお願いいたします。

事務局（健康推進課 菊地班長）

はじめに協議議題の設定理由から御説明させていただきます。

前回の食育推進会議において、食育を重視する声はよく聞かれるようになった、併せて食育推進団体等による取り組みも積極的に行われるようになってきたという報告がございました。しかしながら、家庭における食育機能は低下しており、家庭に対して、直接働きかけるような取組が必要であるという御意見、御提案をいただき、第1回目の会議を終了したところでございます。

改めて、家庭に対する食育の取組状況を確認するため、ライフステージに応じた各団体の取組状況について、健康推進課が把握している範囲で資料3にまとめさせていただきました。

それでは、資料3をご覧いただきたいと思っております。資料3につきましては、事前に資料を配布しておりますので、各団体の取組内容につきましては、説明を割愛させていただきます。思春期及び青年期の取組状況欄をご覧願います。

思春期の欄に縦に1本直線を引いておりますが、これを中学生と高校生の境として、見ますと、高校生に対しては食育の取組が非常に少ないということに気づきます。

また、青年期では、一見、様々な取組が行われているように見えますが、取組内容を見ますと、学校給食だより、学級通信等を活用した食育情報の発信や、農作業体験、親子料理教室など、子どもをもつ親に対する働きかけであることがわかります。このことから、ちょうど思春期の後期にあたる高校生から、親となる前の青年期に対して、食育の取組が非常に弱いということが、明らかになりました。

県では、これまで、食育の推進方策の一つとして、食育推進県民大会や様々な食に関するイベントを通じて、県民に啓発普及を行ってまいりました。

家庭への働きかけにつきましては、学校・幼稚園・保育園などの教育機関や地域の関係団体が表3でお示したような取組を行っておりますが、家庭、ことさら、思春期後期から青年期に対しては、先ほどの報告事項の中でも、御説明しているように、一般県民である親を介して間接的に、啓発・普及を行っているというのが現状でございます。

そこで、思春期後期から青年期に対し、効果的な取組方策や取組を実施する機会の創出方法等について、委員の皆様にご協議いただき、その結果を、平成22年度の予算要求等に反映させていきたいと考えております。

以上の理由から、「思春期後期から青年期における食育の取組方策について」を協議議題としてあげさせていただきます。

続きまして、資料3-2をご覧くださいと思います。働きかけが弱くなっている思春期後期から青年期前期の食育の取り組み方策について、御協議いただくための参考資料として提示させていただきます。

思春期後期から青年期前期までを、高校生、親となる前の世代、そして、親となった世代の3つの期に分類し、この世代の「特徴」と「生活の場、かかわる場」、「食をめぐる現状と課題」について、調査報告されておりますデータや聞き取りしたものから、主なものをまとめております。

はじめに、思春期後期にあたる一般的な高校生の生活環境の特徴としましては、食育の有効なツールである学校給食がなくなることや、夜型の生活リズムがあげられます。情報の入手は、学校や家庭よりも、友人やマスメディアから得ることが多く、その情報に影響を受けやすいという特徴、意識面では、「やせ体型志向」の女子生徒が多いといった特徴がございます。

このような生活環境の中で、高校生は食材の名前や調理方法に関する知識が乏しいという課題、食べることに関する課題では、朝食を欠食することが多い、作ることに関する課題では、料理を作る楽しさを実感する機会が少ないなどの課題を抱えた世代となっております。

次に、親となる前の青年期前期の特徴ですが、高校生と類似する点も多いですが、特徴的なところは、就職等により、独り暮らしの青年では、食を選択する機会が増えること、また、生活パターンの変化が生じやすく、健康管理や健全な食生活は後回しになりがちで、課題としましては、食や健康に対して関心が低く、健全な食生活に必要な知識や自立のために必要な調理技術が習得できていないといった傾向がございます。

また、こうした青年期前期の社会人に対して、働きかける場や機会を確保するのが難しいといった課題もあげられます。

3つめの期であります青年期後期の親となった世代のライフステージの特徴は、意識面では、仕事をもつ女性は家事を負担に感じる人が多い、生活技術面においては、家庭生活の営みに必要なスキルが低くなっているなどの特徴がございます。食をめぐる現状と課題では、「作ること」の項目に記載しておりますように、この世代は、家庭の味を作っていく時期でございますが、家庭料理、郷土料理を伝承していくための調理技術が乏しいといった実態があげられます。

続きまして、これまで、御説明してまいりました資料の3-2を裏付けるものとして一部のデータではございますが、資料3-3にまとめておりますので、御覧いただきたいと思っております。

まずはじめに、左上の「朝食欠食者の年代別割合」のグラフをご覧ください。平成17年宮城県健康栄養調査によりますと、朝食をほとんど食べない、週に4~5回食べないと回答した朝食欠食者の割合は、男女共に20歳から39歳の年代が最も多く、思春期における欠食習慣が助長されていることが推察できます。

次に、左中段にあるグラフ、「やせ(低体重)の年代別割合」をごらんください。先ほど、思春期後期の特徴として、「やせ体型」志向が強いということに触れましたが、平成19年の国民健康栄養調査によりますと、全国データとなりますが、20代の女性のやせは25.2%で4人に1人がやせと判定されております。

次に、右上のグラフをご覧ください。全国データとなりますが、「地域や家庭で受け継がれてきた料理や味の年代別伝承状況」調査の結果では、わからない、伝えたいものがない、知らないと回答した割合の合計は、20代男性は55.3%、20代女性では35.9%となっております。

さらに、左下にあります表をごらんください。平成18年社会生活基本調査の宮城県データによりますと、1日平均の食事時間は15歳から24歳の男性では、1時間18分、女性では1時間16分で、食事にかかる時間が、各年代の中で最も少なくなっております。また、1日平均の家事時間は、15歳から24歳の男性では4分、女性では25分となっており、食事づくりなどに携わ

る家事時間が驚くほど少ないのが実態です。

続いて、右下にありますグラフ「農作業体験等への年代別参加割合」をご覧ください。

平成19年に行われた「第14回 持続可能な国土管理専門委員会資料」によりますと、農作業体験などの直接的な活動と、農作物の直販など間接的な活動も含めた参加割合が最も高かった年代は30代で、最も低かったのが20代という結果になっております。これは、資料3 - 2にも記載してございますように、30代という年代は、こどもと一緒に学校や地域で開催される農業体験や食の現場見学など、体験学習の機会が増えるという結果によるものと、推察できます。

再び、資料3 - 2にもどっていただきたいと思います。これまで、思春期後期の高校生、青年期前期、後期の青年の特徴や食をめぐる現状と課題について、説明してまいりましたが、プラスの面にも目を向けてみますと、農業高校や、調理科を設置している学校では、酪農や農産物栽培、食品加工、調理に関する知識や技術を学んでいる生徒がおります。また、大学で、食品の成分、機能、加工、栄養、調理、酪農、保育、教育について、専門的知識やスキルを学んでいる学生もおります。これらのことから、思春期後期から青年期における食育の取組方策について、2つの方向から、御助言、御提案を頂戴したいと考えております。ひとつは、高校生や大学生が持っている知識やスキルを生かして、支援者として、幼児や児童、生徒などに食育に関する情報を発信していくような方向です。もうひとつは、思春期後期にあたる高校生や青年期前期及び後期の青年が学習者として、自らの課題を解決するための学習の場や機会をつくりだしていくという方向です。資料の下段に協議の視点として、参考までに3点ほどあげさせていただきました。1点目は、思春期後期にあたる高校生や青年の育ちを支援できるような取組としてどんなことが考えられるか。2点目は、地域とのつながりが弱く、食に関して関心が低い高校生、青年に対してどのような働きかけを行うことができるか。3点目は、食を通じたつながりを創り出すために、この世代をどのような形で受けとめることができるか、アプローチする内容等について、でございます。

事務局からの協議議題の設定理由と資料の説明は以上でございます。

議長（平本会長）

ありがとうございました。本日の協議事項ということですがけれども、事務局の方で、思春期後期から青年期ということで、ライフスタイルが広いのですけれども、最も食育として取り組みにくいと言われているライフステージの人たちに、ターゲットを当てようということで、果敢な提案なのですけれども、ここ何年か食育をやってきましたので、新しい切り口としてやってみようじゃないかということだと思いますけれども。

まず、協議時間は1時間ほどございますが、今協議の視点につきましても御説明いただきました。一般的な課題はあるのですけれども、ここにお集まりの委員の方々に、この世代についての食の課題というようなものを実感として、こういうのがあるよねというようなことを少し挙げていただいて、課題の共有といたしますか、そういうものを示させていただいて、解決の方向について、こんなことができるかなといった方向に進めればと思うのですけれども、よろしいでしょうか。

いろいろな分野から委員にお出でいただいておりますので、御発言いただきたいと思えます。如何でございますでしょうか。今、事務局から一般的に挙げられている課題について資料の3 - 2とか3 - 3に挙げていただいておりますけれども。実感としてこういうのがあるよねということ、生の声でお話頂いた方が、次のお話に移りやすいのではないかと思います。いかがでしょうか。

加藤委員（宮城県生活協同組合連合会）

生の声ということで、私の友人のところの男子大学生について、びっくりしたことを聞いたのは、お母さんが夜仕事で遅いので、お金をやるから帰りにどこかのお弁当屋さんで食べたい物を買って食べなさいと言ったところ、食べるのが面倒くさいし、弁当屋に行って何を食べたいか考えるのも面倒くさいから、食べないから、お金だけは貰うと言っていたという感じだったということで、お腹が空いたら何でも食べたい物を選ぶはずなのに、何を变なことを言うのかなと。とにかく何を食べるか考えることが面倒くさいというような、その息子さんの話だったということに、びっくりしてしまっただけですけれども。

あとは、知り合いの人が食育の講師活動のようなことをされている方がいらして、20代、30代の若いお母さんと幼稚園児くらいのお子さんに対して、ちょっとした料理教室

を開いた時に、お母さんたちがネイルアートをした爪のまま調理をするのだけれども、爪が汚れるから何もできないというような状態で、子どもに逆に「お母さん、そんなのではだめだよ」と怒られているお母さんが、一人ではなく、何人もいるというのに、私の知り合いの講師が驚いてしまって、普通なら料理をするのだから、爪くらい切ってきて手を綺麗にするはずなのに、今の人たちは違うのねというような感想を言っていましたので、最近私が知り得た情報です。

議長（平本会長）

ありがとうございます。今、大学生の話が出ましたけれども、畠山委員、日々大学生と出会い、いろいろな試みをなされていますけれども、お話いただけますか。

畠山委員（東北福祉大学 教授）

私が勤務しております大学では、先般の会議でもお話をしましたように、食育の取組に対し、文部科学省から学生支援GPの助成を得ながら、食育展開を進めているところです。予算を確保して諸々の食育の実践を行っているわけですがけれども、取組の根幹にあることは自己の健康管理能力を食を通して自立の方向にもって行くことでありまして、食の営みの自立を目標に掲げながら進めております。しかしながら、この時期の食育というのは難しく感じております。何が難しいかということ、意識の高揚という点です。大勢の若者たちにこのことを期待するというのは大変難しいところです。一部の非常に意識の高い学生や保育士になろうとか食品衛生管理者・監視員を目指そうというように資格がらみで食育が必要だという学生たちは、大分前向きに取り組んでおります。また、彼らを通して底辺が広がっており、期待が膨らみます。しかし、多くの学生たちは、先ほどから話題に上っていますとおり、食が非常に大切であるという意識が欠落していると思われまます。現在、幼いときから食育が導入され、学校給食を通して食の大切さが子どもたちに伝わっていますので、大きくなったときに、きっとそれが糧になって良い方向に進んで行くだろうと思えます。高校生以降の青年期前期に位置する子どもたちは、食育の展開が社会的にもまだ十分になされていない状態で育ってきたらと思うれまして、意識の低い男子大学生、食以外のことに興味関心が高い女子学生といった層にとっては、食育実践の場を提供しても、なかなかそちらを向こうとしないというところがあります。このことは私どもの大学でも課題になっております。ありとあらゆる視点から良かれと思われることを行っておりますが、参加人数の確保という点ではよい状況ではありません。そんな中で、解決の糸口を探っております。若者たちは何に関心があるのかということを探ることが大切だと思えます。例えば農業体験では大掛かりなものより自分のアパートのベランダでのプランター栽培の方法やお魚のさばき方、大根のいろいろな切り方といった身近なことに興味があるようです。生活重視の身近な食育展開がこの時期の大事な視点であるように感じています。

議長（平本会長）

ありがとうございます。詳しく、課題から取組の切り口までお話いただきました。小田委員、どうなんでしょうか。この世代の人たちの食なのかライフスタイルなのか分かりませんが、そういうところがメディカルなところで現れているような課題はありますか。

小田委員（宮城県医師会）

極端なことを言いますと、脚気が今必ずしも無くなっていないということがありますよね。私が診療をしまして、病気というのはどんな病気でも自分の身体でなくては治せない。お薬で治すのではなくて、自分の身体で治すのだということを言うのですけれども。そうすると、皆愕然という顔をするのですよね。実際知ってはいるけれども、その重要性を認識しない。若者というのは力で行きますから、若いうちは少々眠らなくても、食べなくても健康でいられる。それがある程度の年齢になるとそうはできなくなるということを心配はするのですけれども、振り返ると、我々も別にそんなに一生懸命考えて食べてきたわけではないし、それなりに長生きするようになってきたわけであるから、心配はないのではないかと考えます。食育というのは非常に範囲が広くて分かりません。

議長（平本会長）

ありがとうございます。痩せの若い女性のデータとか出ておりますけれども、それが医学的な問題にまでは、まだ行ってないというところでしょうか。

少し農業分野からも、この世代の人たちの驚くようなことと申しますか、課題のようなものはありますでしょうか。三塚委員いかがでしょうか。

三塚委員（宮城県農業協同組合中央会）

私どもJAグループで今やっているのは、思春期の後期、高校生までがいろいろな農業体験とか、勉強する機会を提供しているわけですがけれども、比較的スムーズに受け入れられているのかなと思っていましたところ、今いろいろとお話を承っておりますと、必ずしもそうではないという実態が分かってきました。特に大学生になってから、青年期の前期ですか。農学部の学生とかとは接する機会がありますので、ある程度共通点があると思っております。私どものイベントなどで学生アルバイトなどを使う機会がありまして、いろいろなところから募集しますと、いろいろな学生がやって参ります。そうすると食に対する価値観というのは、私どもとは全然違うのだなということが、非常にショッキングな出来事として出て参りました。どういうことかということ、イベントでアルバイトとして頑張っていた場合には、昼食としてお弁当を準備いたしますが、最初から僕はこれが嫌だからということで、目の前でおかずを分別しまして、食べない物は、私たちの目の前で捨てます。一人当たり千円から千五百円の昼食代が掛かっているのですが、そういう価値観は全くなくて、私は最初からこの野菜は嫌だから食べない。親から自立していますので、自分の選択肢にはそれを食べるという道はないのですね。これは違うなと、これをこのままにしていいたら、大変なことになるなというのが実感としてあります。確かに若いですから行動力とか体力とかありますから今のうちが良いのでしょうかけれども、自分が親となり、30代、40代となってきたときに、ああいう価値観をそのまま持っていたら、絶対ひずみが出てくるという感じがしておりました。

議長（平本会長）

平塚委員いかがでしょうか。

平塚委員（宮城県漁業協同組合）

我々は、先ほどお話しいただいたように、海からあがるものなので、今社会で一番、特に今お話があります思春期なり青年期の方々に、こういうものは良いのだということでお話しても、食べてくれるかどうかが一番難しい年頃かなと。先ほどもお話があったように、これからのことを考えたときに、もっと少年期、小さいお子さんを利用した形という語弊があるのですが、そういう子どもさんを持っている年代の親御さんに、やはり食の大切さというものを小さいときから植え付けていかないと。今、社会では夜でも24時間体制で、お金さえあれば自分の好きな物が自由に食べられるということで、家族団らんで食の場を捉えるというのが難しい環境にあるのかなということで、我々も小学生等々に体験学習等を手伝っていただきまして、食の安全安心、衛生管理に注意しながら魚食普及に努めなければいけないということで、今一生懸命頑張っているところでございます。以上です。

議長（平本会長）

ありがとうございます。他にございますでしょうか。

次にこういうことができそうということ。今、県でこの世代をテーマに取り上げたということは、それに向かって一歩進もうということでございますので、少し自分の分野であったら、こんなこともやっている、こんなことも出来そうだなというようなことを少し挙げていただいて議論できればと思います。それで、資料の3-2のところも御覧いただきますと、先ほど御説明いただきましたが、この世代は、自分が学ぶ、学習者としていろいろな学んでいくと同時に、自分が子どもの親だけではなくて、高校生が小学生にとか、大学生が小学生にとか、いろいろな形がありますので、自分が誰かに教えるという世代でもあります。両面がある世代なので、そのことを活用するとこのようなことができるのではないかとということをお話いただきたいと思います。この資料の下の方にも、このような切り口があるのではないかと書いていただきましたので、よろしくお話ししたいと思います。

それでは、小学校の杉崎委員。それこそ子どもたちに、この人たちは何かできそうということがございましたらお願いいたします。

杉崎委員（宮城県小学校長会）

私は小学校ですので、卒業すると間があいてしまいますね。再び接するのは親になった方たちと接することが多いと思います。親の世代を見る場合、やはり子どものお弁当が一番よく分かります。子どもがお弁当の日にはどのようなお弁当を持ってくるかで、親がどのような食生活を送って、親になっていったかというのが大変良く分かります。やはり非常に差があるというか、本当に楽しんで子どもに食べさせようとして、綺麗で栄養のあるお弁当を整えてくれる親と、本当に苦しんでくる親と、もっとひどくなると、食パンをそのままや、コンビニから買って来たものを詰め替えてというか、詰め替えるだけでも良いなというか、そのまま持ってくる親もいるということで。私たちが学校として働き掛けることができるのは、子どもへの教育はもちろんですけれども、子どもへの食育を通して親を教育していくということなのだろうと思います。今、小学校でも中学校でも食育を盛んにやっております。うちの方でも、子どもに食の教育をしています。その結果を食育通信で家庭へも知らせるということをしてしながら、半分保護者を教育していく。そういう形で学校という場、空間でいろいろやっているところでございます。

学校という場があれば、いろいろな教育ができるのですが、そこを外れた時の青年期に対する教育ということでもありますけれども、なかなか難しいかなとは思いますが、自分で選んでいろいろ体験できる機会というものがあれば良いのかなと思います。農業体験や漁業体験をしながら、生産した物を自分で作って食べるという、そういう楽しい体験を青年期にいろいろできれば、親になったときに食に対する関心が高まるのではないかなと思います。私の今の場ではないので、皆さんの御意見をお聞かせいただければと思っております。

議長（平本会長）

杉崎委員、小学校に例えば親が教える立場になって関わるとか、高校生や大学生が子どもたちに教える立場になって関わるとかというようなことはございませんでしょうか。

杉崎委員（宮城県小学校長会）

それは生活科等で、子どもたちがいろいろ調理をするときに、親も一緒になって、親も一緒に調理をすると、例えばモロヘイヤを作っている地域ではモロヘイヤのまんじゅうであったり、地場産品を使った調理等をしますけれども、その時に保護者に来て貰うということはありません。そうすると、親も喜んで一緒になって勉強していくことはあります。

議長（平本会長）

高校生や大学生などは、何かそういうことで関わるとか、コラボしていくということはございますでしょうか。

杉崎委員（宮城県小学校長会）

今は、小学校ではしていませんけれども、でも、きっと楽しいかなと思いますね。この前、市の給食祭りの方で、明成高校の生徒さんたちでしたが、お味噌汁を見せてくれたとき、子どもたちが非常に喜んで、やはり先生たちが教えるよりも、身近なお姉さん、お兄さんたちがいろいろなことをやるということは、子どもたちにとって大変興味のあることかなと思います。

議長（平本会長）

ありがとうございます。今、杉崎委員が言って下さったように、この人たちが教える側になったときに学ぶので、教えることを通して成長させる。そういうやり方ですね。そういうところが小学生、中学生などでは結構やられているのかなと思います。

次に藤本委員は保育所ですけれども。

藤本委員（宮城県保育協議会）

保育所におきましては、この世代と言いますと、子の親、要は保護者が当たるのだら

うと思います。生の声から申し上げますと、この間ちょっと話題になったのですが、1歳過ぎている子どもなのですが、朝ごはんは飴3つなんです、この子は午前中とっても機嫌が悪くてという話がありました。

また朝ごはんの県のデータを見せていただきましたけれども、亶理町内の保育所でとったデータによりますと、母親が主に対象となると思いますが、「毎日食べない」は9%程度だったのですが、「毎日食べない」「食べない日もある」を合わせると29%、3割の親がそのような現状にある中で、子どもはどういう食事をして朝登所してきているかなど、問題は沢山あると思います。今、杉崎先生の方からもお話がありましたけれども、保育所の現場で考えてみますと、やはり子どもを通して親を変えていく方法とか、あるいは親と共有しながら変えていく、変えていくという言い方が良いのかどうか分かりませんが。それから親に直接介入する方法など考えられます。それらを並べながらすすめている状況なのですね。例えば、直接というのは、保育参観を利用して、お話してみたりとか、あるいは試食会を通したりとかという場面があります。共有という部分では、親子料理教室をやって、親と子が一緒に体験を積んでいくとか。この間もあるクラスで、親子でバランスコマを使って自分たちの食生活を振り返ってみようよというようなことをやりました。それはそれで後々まで話題に登ったり、続けてやっているというようなことがあったので、親子で共有するというのは、この世代は大事なように思っております。それから子を介してですが、保育所でいろいろな取組をやっておりますけれども、その取組がお母さんやお父さんが帰りに迎えに来たときに、その子どもから出る言葉やその場を知らせる写真などから、親は少しそのことに興味を持つだろうという希望もっています。高校生の世代や大学生の世代とのかかわりは、すごく薄いと思うのです。たまたま、職場体験ということで、中学生や高校生が2~3日体験することはあるのですけれども、それは全く今現在、自分を振り返ると、保育の体験のところの主だったなと思いながら、そういう部分を考えて、そういった場面を活用して、食の部分で出来ることのあるのだなと気づかせていただいたところです。

若生委員（スローフード・ジャパン）

私たちも、いろいろな食をテーマとしたイベントなどをやっています、何千、何万という人たちが集まってやっていますが、食をテーマにしたイベントに参加していない世代というのが、ちょうど今日テーマになっている世代ではないかと思えますね。参加対象で一番多いのは親子連れ、いわゆる親と学童期の子ども、それと以降の少年期、高齢期という世代が主で、この世代が食をテーマとしたイベントやいろいろな食育事業などに参加する層としては一番薄いかかと実感として感じています。とは言っても、若者たちに食に関心をもって貰わなければいけないのだと言ったときに、農業とかに関心を持っていただきたいということで、ユースフードムーブメントというプロジェクトをやっています。これは世界の若者たちが食をテーマにしたネットワークを作っていく。一昨年秋から取組ははじめましたけれども、まず手始めに各大学毎に食をテーマとした、いわゆるスローフードのコンヴィヴィウムという形で、グループを組織化していき、そこでネットワークを作っていく、その若者たちが若者たちをどんどん巻き込んでいくというプロジェクトなのですけれども、お陰様で一年目で全国で2,500人くらい、日本の国内でも12~13の大学が賛同していただいて、慶応大学などは百人以上の会員数があるくらい集まってきておまして。全体として最近すごく思うのは、確かに全体とすれば食に関心を持つ若者たちは少ないのですけれども、以前に比べれば関心を持つ若者たちは、ここ数年確実に増えてきているなとすごく実感をしています。今回のテーマの部分で、支援者と学習者という両面でという事なのですけれども、それにまた別な見方をすれば、共に学び合う、同世代が同世代を集ってネットワーク化していき、そこで学び合う、共に刺激し合う、そのような方策も一つの方策として考えていけるのかなと思っております。

議長（平本会長）

ありがとうございます。一つの新しい視点として、同世代の若者が社会活動とかグループの作り方とかいろいろありますよね。余った食材をキープして回すとか、イタリアの方で、そういうことをどんどんやっていこうというようなことをお話いただきました。

佐々木委員（宮城県食生活改善推進員連絡協議会）

私は食生活改善推進員なのですが、私たちの事業の中に、健康日本21の課題に対して、ヘルスサポーター21事業というのがあります。それは対象が一般と、中学生と高校生もあるのですが、一般は大体良い事業ができるのですが、中学、高校に入って行くというのはなかなか難しいです。一度入っていけばずっと続くということがあるのですが、今後中高生に対しての事業をもっと普及できれば良いのかなと思います。また、私は栗原市なのですが、昨年健康づくり大会というのが栗原市であったのです。毎年あるのですが、その時に食育クイズ王決定戦というのがあったのです。3人1グループになって、幼稚園から高校生までの3人1グループになりまして、食育クイズ王決定戦というのをやったのです。私たちが食改として外でいろいろなことをしているときに集まって来るわけです。そうすると3人組の若い男子高校生とか、ミニスカートをはいた女子高生とかが集まって来るのです。栗原でもこのように参加してくれる若い人たちがいるのだと嬉しくなったのですが、こういう場面もあります。それから一迫商業というところがあるので、そこでは地産地消ということで、栗原市内の食材を使ってお弁当とかを作ったりしております。そこで私は考えたのですが、例えば中学や高校の文化祭などがありますよね。そのときにコンテスト形式で自分たちの食育を見直す方法として、例えば小学生に対して何かをするような企画をして実施するようなことがあったら、嫌だと思われるかもしれないのですが、楽しいことを企画して実施できたら良いのかなと。実施するときに私たち食改推進員も手伝えれば良いのかなと、皆さんのお話を聞きながら考えたりしました。以上です。

議長（平本会長）

中高にヘルスサポーターが入りにくいということがありますが、それはどういう理由でしょうか。

佐々木委員（宮城県食生活改善推進員連絡協議会）

学校にお願いするときに、お願いの仕方とかもいろいろあるのでしょうけれども、高校に行ってお願するというのが私たちには良く分からなかったりとか。

議長（平本会長）

今、そういうことについてのコーディネートは、本当に行政というか市町村等で食育推進会議を作っていますよね。そこの人たちがうまくつないでいく役割をしていて、そこに言えば良いと思います。そのようなところにお話すれば、こういう方法もあるといった話も出てくるし。そのような会議体のところが、そのようなつなぎ役をして下さっているの、是非御活用いただければと思います。平塚委員お願いいたします。

平塚委員（宮城県漁業協同組合）

そうですね。実は17日に、我々の組織の中の女性部の方々を中心に、企業化ということに対しての取組が2～3始まっているのですが、そういう中で、漁業関係者がとってくるもの、あるいは作る物は、なかなか料理、食べるまでには手間がかかりますから、普及していく活動、こういうことに力を入れていったらどうなんだろうということいろいろ話し合いをしています。先ほどからお話が出ていますように、我々が育った時代と違って、便利な世の中が自分の生きるための食べもの、それを人様からいちいち教育を受けて食べなければいけないということに対しては、我々の年代としては考えられないし、そういう機会をもっと取った方が良いのではないかと。生まれ育った小さい時から、毎日の食生活はこういうものだということを植え付けていかないと、こういう思春期だとか、高校生あるいは大学生といった、一番家族から離れて生活する時期になると、食に対する有り難み、感謝というものも、大分薄いようなので、取りあえず我々も食べものを相手にして生活している組織でありますので、国民の方、あるいは県民の方に役立つように何をすべきかということでこれから頑張っていきたいと思っています。

議長（平本会長）

この世代は実際に活動していて、そこから学んでいくという世代だと思うのですが、今仰ったお魚の加工を企業化していくというのは、ちょうどこの辺の世代がうまくやれそうなのですか。

平塚委員（宮城県漁業協同組合）

一つは、我々の組織はとった物の共販制度といいまして、組織の力で買っていただく方に提供して値段を付けていただいて、物をやりとりしているのですが、なかなか農業の方も一緒だと思うのですが、やはり値段が自分たちが経費をかけてやっている産業として、成り立たない状況までいっているということで、できることならある程度、とってくれる人、作った人がこれはこのくらいの値段でということで、売の方が値段を付けて販売する。そういうことを組織の力で共同してやっていこうという中で、たまたま女性部の方が企業化、これも自分たちが毎日前浜でとったものをどういうふうな料理をして皆さんに提供したら喜んで買っていただけるかということもお話があったので、これらも含めて組織全体でこれからやっていくという考えです。

三塚委員（宮城県農業協同組合中央会）

私どもでは、地域農業を元気にするという前提のもとに、地域に住んでいらっしゃる方々に健全な食を提供したいと思っております。最近ではメタボが非常に話題になっておりまして、私自身もあと10キロ落とさなければいけないわけですが、やはり健康な肉体を作るにはバランス感覚の回復が必要です。食べ過ぎもいけませんし、栄養の偏りもいけないわけでありまして。そういう状況下において、宮城県は非常に農林水産業に恵まれた県でございますから、地域の自然が育む大地の恵みと言いますか、農林水産業が生み出すことが出来る健全な食を地域の方々にしっかり理解をしていただいて、バランス良くとっていただくことで、いわゆる食なり、自分自身の身体の健全性を回復していただきたいというふうに思っております。そのためには、ただ一次産業は作る人、消費者の方は食べる人というだけではなくて、やはり生産現場にもっともっと地域の消費者の方々に入ってきていただきたいと思っております。地域の農林水産業は多面的機能を持っています。生産現場、生産するだけではなくて、そこには癒し効果があったり、国土保全などいろいろな役割を果たしているわけです。特にこの世代については、地域の農林水産業の意義をまず理解をしていただきたい。特に18歳以降の部分については、食というのはいつでも自分で選択できるという意識から自分で選別してしまうのだと思うのです。ですから、そこにどういう価値観を与えられるかということで、私どもはいろいろな取組をやっていきますし、参加型のイベントも含めて、どんどん若い人たちを取り込む形でやっていきたいと思っております。あとは、子育てしている人は、もう少し真剣に自分の子どもを育てているわけですから、その辺に対して押しつけがもしれませんが、強力なアプローチをしていきたいというふうに考えています。

議長（平本会長）

ありがとうございます。この辺のところは、本当に薄くなっているところであり、親子は参加型が多いということがデータで出ているのですけれども、そこまでいかない人たちが農業の所に行けるような、参加出来るような仕掛けを作りたいと思うのですよね。

三塚委員（宮城県農業協同組合中央会）

大学生クラスになりますと、中には仕事をしている人もいますし、多分忙しくてなかなか難しいかもしれませんが、ただ、地域にはいろいろな農業生産をやっている人もいますし、水産業をやっている人もいます。そこに気軽に土曜、日曜でも良いので入ってきていただけるような、そういう仕掛けが出来ないだろうかというような。逆に今農業を一生懸命やっている若い世代が考えはじめています。テストケースとして来年から仙台の岩切の方で、そういう事業をやろうと思っておりますが、同じ世代をどんどん取り込んで、あそこでは曲がりネギを作っていますが、みんなでネギを作らせてみようではないかと。出来れば一畝ずつオーナーになっていただいて、それをギフトにまで使ってもらおうという話までありまして。これはまだ点の取組かもしれませんが、そういう取組が同世代を巻き込んで自分の食を考えるきっかけになればいいのかなと思っております。

議長（平本会長）

ありがとうございました。子どもの教室、そこに若者が手伝えるような、斜めから入

っていけるようなところを作って下さると、良いかなと思うのですが、よろしく願い
します。

加藤委員お願いします。

加藤委員（宮城県生活協同組合連合会）

私が居ります宮城県生協連の中にありますみやぎ生協、お店でやっているところもある
のですが、そういった所で産直品ということで、農業高校の高校生の育てた豚肉を産
直豚肉として高校生自らお店に来て、ピンク色とかの可愛いつなぎを着て販売してい
たりしていたのですが、お店だとなかなか主婦層の方が多いので、そういった高校生が
実際に自分たちで、農業高校だと豚だけでなく様々なものを自ら作って、多分直売所と
かに出していると思うのですが、そういった高校生たちがこんな活動をしてこ
んなふうを考えて、お店で売って、こんな体験をしたという生の声を、先ほど同世代を
ネットワーク化することが良いというお話がありましたが、そういった情報交流みたい
な、一般高校に行っている子たちのように自分たちの世界だけが普通の生活だと思っ
ている人たちに、こういった活動をしている人たちもいるのだという情報が交流、交換で
きるような形がとれば良いかなと思いますし、なかなかこの世代だと、声をかけて集
まって学習をしてもらうというのは難しいと思うのですね。ですから、若者たちは今パ
ソコンとか携帯は必需品状態ですので、そういったパソコンの何かホームページ等を通
じて発信できるような形を取っていったりとか、もっと一歩前に行けば、何かこの世
代の方々に登録してもらうような企画を作って、参加型の形ができればと考えております。

議長（平本会長）

ありがとうございました。非常に具体的な良い御意見をいただきました。渋谷委員お
願いいたします。

渋谷委員（みやぎグリーン・ツーリズム推進協議会）

どこまで行ったら、どこが源でこういうふうになってきたのか、ぐるぐる回っている
ような気がするのですが、まずはじめは、学校の中で調理実習が無くなってきた
ことが一つの大きな原因ではないかと思えます。本当の基礎が分かっていない。その人
たちが育って、今の親になって、尚更子どもにどういうふうに食べさせたら良いか分
からないという状態が出来てくるのではないかと思えます。

私の所はグリーン・ツーリズムとしてここに参加させていただいているのですが、本
当に農業をやりたい、それから生産をやりたいと言うのであれば、うちの方では、ど
のようにでもお引き受けすることができるのですが、今の人たちはなんと言っても
腹が減っていないですね。腹が減ったから何とかして自分で食事を作ろうという意欲が
ない。ロボットが何でも良いからエネルギーらしき物を口に詰め込めば、ひとりでに動
くんだというような、何か生きていくという意識が少ないのではないかなと思って見て
います。それでその世代がどこで違う世代と一緒にになれるかなと思うと、中学生や小学
生が町が主催する青少年団体のようなもので、いろいろ活動をしているのですが、その
中で一緒に活動することはできないかなと。さっきもお話があったのですが、農業
高校生がいろいろな生産物を持ち込むアンテナショップみたいなものを作って、そこ
に同世代の人たちを寄せる、あるいはそこから携帯のネットで発信させるようなこと
もできないかなと思います。爪が大事なのか、自分の身体が大事なのか、お肌の状態が
大事なのか、両方皆大事だと言われればそれまでですが、その前に身体がどのようにして
出来ているか、とにかく腹を減らして見なければダメなのではないかというふうに思
いました。

議長（平本会長）

ありがとうございます。みやぎまるごとフェスティバルに高校生のショップとか、大
学生のショップとか出せばよいですね。小田委員お願いします。

小田委員（宮城県医師会）

食育というのは難しいですね。その中でも一番難しいのが高校生ですが、何故それを
一番最初に選んだのかなと思いつながら聞いていました。今働く女性が多くて私たちが仕
事を続ける為には、家で最初からそういう生の材料を刻んで、調理をするということは

諦めなさいというふうには、例えば私が医師会などで女性医師に話すときには、そういう話をします。既製品を皿の上に並べて夕飯の支度をしたということに罪悪感を捨てるようにというような言い方をします。そういうことについては、私としては取組の方法は少ないと思います。ただ、皆さん食事に興味が無いというのは、皆あてがいぶちなのですね。小学校から給食があって、お盆にワンセットになって出てくる。ある程度はアラカルトのように自分で選んで食べる習慣もそこで付けても良いのではないかと思います。多様性の時代ですから、いろいろな生き方があると思いますけれども、食育は大事なことであって、かつ一番難しい世代だと思います。

議長（平本会長）

ありがとうございました。山本委員お願いします。

山本(壽)委員（宮城県歯科医師会）

いろいろよく考えてみますと、範囲が広すぎて食育というのは本当に難しいですね。今、資料3-2を見ながら、食をめぐる現状と課題というところに、知識というところから考える、食べることから考える、作ることから考える、食環境から考えるといった分類の仕方になっていきますけれども、もう少し細かく分けてお話あいをしていただくと、私たちも理解できる部分もあるのかなと。農業が出てきたり、漁業が出てきたり、学校教育が出てきたり、どこで何をどのようにまとめたら良いのか、分からないというのが現状です。

私たち歯科の立場から考えた場合に、当然歯科保健を通じてやっていることは皆食育なのです。何度も言うように。それをどっちを頭にするかの違いで。それで一番難しい年代なのです。この年代が。というのは、法的に規定されている歯科検診は、この年代は無いのです。高校生まではありますけれども、高校を卒業すると40歳まで何も無いのです。そのような環境にあります。何故無いのかは私も良く分かりませんが。そこで考えていかなければいけない現状があることと、この辺を打破するためには、我々としては、ここの年代だけでなく、やはりライフステージに沿ってきちんと乳幼児から歯科保健に取り組む。乳幼児に歯科保健活動を行った場合には、乳幼児は聞いていませんから。聞いているのは親ですから。要するに親の教育部分をまず乳幼児検診等ですということ。来年度からは県の御理解もいただきまして、妊産婦の検診をモデル的にしてみようかなという計画があります。多分来年度から少しずつ始まっていくと思いますけれども。そういうふうにして、まず親を教育してきちんと認識を持たせるという状況をまず作らないと、このような年代で急にやったって、生活習慣などはもうできていると思うのですよ。それが良い習慣なのか、悪い習慣なのか。多分悪い習慣が多いから食育食育と騒ぐのだと私は思うのですけど。我々としては、ここということでは無くして、ライフステージに沿って、きちんと歯科保健指導をやっていければ、かなりこの年代にも結果として出てくるのではないかという考え方をしています。

議長（平本会長）

ありがとうございました。畠山委員お願いします。

畠山委員（東北福祉大学 教授）

いろいろお話を伺っていますと、全てのことが大切であり、整理してみる必要を感じます。思春期や青年期の食育について考える際、この時期の食生活実態から浮かび上がってくる若者たちの危うさについて、委員としてどれくらい実感できるかというところが、一つのステップになるように感じました。わたくしどもの調査によれば、18~22歳までの若者たちは、生化学検査などによって自身の健康状態を客観的に捉える機会がなかったことが分かりました。大学に入ってから行われる血液検査で初めて自分の体の状態を知る人が多いようです。健康実態は残念ながら芳しくありません。特に男子は中性脂肪値が高い状態にありますし、女子はLDLコレステロール値が高く、また貧血傾向にあります。食事はご周知の通り、サーカディアンリズムを刻むとされておりますが、食事のタイミングが整えられておらず、リズムが狂いがちな傾向にあります。この時期の若者たちは親の監視下から離れ、自由であるために問題山積の状態にあると思われまます。就寝時刻が遅いことにより、起床時間が遅くなる人が多く、朝食欠食につながります。リズムをきちんと刻んで早寝、早起きができる学生は、非常に健康的な生活を送っ

ておりますが、そうでない場合は生化学データにも影響が出てきます。生活リズムが不規則で食事時刻もいい加減な場合は、食事の質的課題も多く、身体の状態が芳しくないばかりか、気分の状態が良くありません。男子は怒り - 敵意、緊張 - 不安の数値が高く、女子の場合は、抑鬱 - 落ち込み、混乱の数値が高くなっています。一日の心の状態にも食事は影響しています。加えて、感覚にも影響しているようです。若者たちは味覚官能検査において薄い塩味、薄い旨みや酸味の識別が出来づらくなっています。特にコンビニエンスストアやファストフードの食事を多用している人にこの傾向が強いことが分かりました。肉食傾向にある人もこの傾向にあります。具体的なデータをもとにして探っていきますと、この時期、もう少しちゃんとしていないと、今後大変な事になるぞという感じがしてきます。食育の方法論を考えてみますと、ステップ化して捉えてみるというように思います。初級、中級、上級の表現では堅苦しくなりますので、とっかかりとして、これだけはやらなければだめよという「これだけコース」とか、中級に値する「こだわりコース」という形などはいかがでしょうか。ここでは、自分で野菜を作ってみる、作っているところに行ってみるなどを入れてみます。最後のところは伝統や文化というような奥深いところまで捉える「道楽コース」というように、3つくらいのステップで実践してみるといいでしょう。どのコースからアプローチしても良いようにしておくことも大切かと思えます。かつてこの年代に、おいしさの条件についてたずねたところ、好きなメニュー、好きな味付け、空腹であることと答えており、単純明快でした。また、料理をするときの条件は、安い、手軽、簡単、楽しい、美味いと答えておりました。懐かしいという言葉も少数ながら答えられており、嬉しくなります。総じて明快な答えになっています。この年代への食育はあまり難しいことはいらないように感じます。わたくしどもの大学では、いろいろな食育の門戸を開けてあげようと努めております。「食の学校」の展開、お弁当コンテスト、自分が食べる食材は自分で作ってみようという「自産自消」というプログラムでの農業体験、「開けよう食材の窓」というプログラムでの食材学習とテキスト配布、「マイレシピ」という学生たちのレシピ集配布、郷土料理の調査を踏まえたDVDの配布、マイ箸運動、もったいない運動、「食育サロン」での学食改善活動、県内の若手生産者たちに月一回ずつ来ていただいて「大学市場」を開き交流する活動、自分たちが学んだことを地域の子供たちにも還元する活動、炊き出し勉強、コンビニ食やファストフード食の問題についての研究など、いろいろと行っております。そんな中で、毎日毎回の食事がちゃんと自分のものとして定着するように願っておりますが、その難しさも感じております。ファーストステップでは、「これだけはやろうよ」というシンプルなプログラム展開が大切であると感じます。長くなりまして申し訳ありません。

議長（平本会長）

ありがとうございました。

渡辺委員（宮城県町村会）

丸森町では、皆さんもやっていると思うのですが、保育所の隣に畑があるので、食育はそちらから始めておまして、当然好き嫌いのある子も、自分で作った野菜は食べるということで役に立っているのかなというふうに考えております。また、親子で学ぶ日曜農学校とか、棚田保全隊ツアー、地元向けに農業小学校とかやっているのですが、なかなか地元の人たちは参加してくれないというのがありますね。ただ、親の背中を見て子は育つという言葉があります通り、今は体験も何もしていないので、出来ないのは当たり前なのかなと思います。正直なところ。ですから環境を変えてやらないと、なかなか出来るまではいかないし、関心も持たないという感じがいたします。

丸森町の耕野地区というところでは、宮教大の「びっきい」という郷土芸能のサークルの方を呼んで、毎年田植えと収穫の時にお祭りをやるんですね。それでお昼に地元の皆さんが集まって、作ってきた物を食べながら話したりするんですけども、それが結構良くて、先生になってからも横浜の先生が生徒を連れて来て遊ばせたりしていて、生徒さんももの凄く喜んでまた来たいと言っています。やはり体験、経験というのは一番基本なのかなと私は思っております。

また、丸森町には外国から来ているお嫁さんたちがいるので、フードフェスティバルをやっているんですね。それは若い人たちが地域ごとに皆集まってやっていますので、そういう切り口があっても良いのかなと思います。

議長（平本会長）

残っている委員の方、お願いいたします。佐藤委員お願いします。

佐藤委員（公募委員）

私たち「みやぎの食を伝える会」というのは、もともと食文化なり食の伝承をメインとして活動している訳ですけれども、中学生、高校生の生徒さんを対象とする機会を作るのが、なかなか今まで可能性が無かったのですが、主に小学生を対象にして活動して、思春期のちょっと前の年代ということになるのでしょうか、そこからアプローチしています。同じ学校で毎年5年生、6年生に授業を企画して下さるところがあって、子どもたちと接触しているのですけれども、嬉しいことに5年生、6年生の生徒の中に調理の基礎が出来ている子どもが若干ですけれどもいます。こういう子どもの親はどういう方かと、いつも関心を持つのですけれども、包丁の扱い方なり、野菜の扱い方なり、調理の仕方も周りの生徒たちのリーダー役をちゃんとこなしている、まさか前にリハーサルをしてきている訳ではなく、もともとその子どもの持つ能力ではないかなと思って、本当に嬉しい経験を私たちはさせてもらっています。授業の時は、子どもの授業ですから、親は入っていないのですけれども、別の機会に親子料理教室というのをやりましたけれども、親子という授業と、子どもだけの授業ではプラス、マイナスがあるのですね。私たちは、子どもへの効果という面では、どちらが良いかは結論は出せないのですが、子どもたちだけの授業でよく思うのですけれども、その時は、学校の給食をストップして試食には必ずおにぎりを企画して、それに郷土食をプラスして作るのですが、子どもたちの食欲旺盛なのびっくりさせられます。先生方に学校の普通の給食も食欲旺盛なのですかと聞くと、普段は給食の何割かは残すのですと言うのですけれども。ここで作って食べる物は鍋の中はいつも空で、その学校の校長先生が少くらく僕にも味を見せてと言うときがあるのですが、それがなかなかできないで、子どもたちの食欲旺盛なのに私たちも驚いています。例えば、おにぎりを作るのですけれども、おにぎりは一人当たり大体4個か5個用意はするのですが、平気で6個くらい食べる子もあったりして、そんなに子どもたちは米のご飯が好きなんだというのも体験しております。それから授業の中では、調理する、食べるだけで終わらせないで、私たちはその必ず食材について、どこが産地なんだとか、いつが旬なのかとか、どのような栄養があるとか、身体にどんなプラスがあるかなどをやったり、郷土食ですので、どのような殿様が居たときにこれが出来たんだよとか、どうやって伝承してきたんだよとか、その時の農家の人たちはどのような暮らしをしていたんだよとか、そういうのもプラスしながら、子どもたちにお話すると、本当にびっくりしているいろいろなことに興味をもってもらっているように思います。

議長（平本会長）

ありがとうございます。千葉委員お願いします。

千葉委員（公募委員）

食育研究会を立ち上げております、千葉恵美です。現在料理教室をメインに活動させていただいております。食べる物は身体を作るだけではなく、心を作るのだというところで、「ありがとう」とか、そういうものをちゃんと言えよう料理教室にしようねということで、みんなで作っております。今対象は、ベビーカーを押しているお母さん、障害を持っているお母さんたち、親子という方たちが多いのですが、今日の議題の方向性とか、青年期ですか、そういう方、独身の方もいらっしゃるのですが、なかなか高校生を対象とすることは無かったのですが、最近自分の中で、一人住まいをはじめた高校3年生、そういう子どもたちにも、そういう料理教室、簡単な味噌汁とご飯の炊き方と、卵焼き、そういうものは今までお母さんが教えていたのですが、お仕事をされているお母さんが多いようなので、そういうところだけでも良いので、そういう料理教室もやっていこうかなと思っていたときの今日の議題でした。ですので、これから私のやるべき事というのは、今まで通り、一人ひとりこつこつと食が大切だということを伝えていくべきかなということで、高校生といった方にも伝えて行きたいと思っております。以上です。

議長（平本会長）

ありがとうございます。山本委員。

山本(あ)委員（東北農政局）

いろいろ皆さまの活動を聞かせていただきまして、農林水産省といたしましては、皆さまのコーディネーター役になれる道筋を見つけないといけないのではないかと再確認いたしました。

議長（平本会長）

田原迫さん、お願いいたします。

田原迫委員（東北厚生局）

今日の資料3 - 2の下の方で、アプローチする主な内容と媒体情報という部分がありまして、その中で、ツールとしてカルタを用いるというのがあるんですね。私は、2月の上旬に仙台メディアテークというところに顔を出してうろうろしていたのですが、その時、専門学校の仙台カレッジオブデザインというところが、第13回の卒業・進級作成会というのをやっています、ちょうどその中に、いろはカルタというのが出品されていて、そのカルタを見ますと、食材、果物をテーマとしたいろはカルタになっていて、そのイラストは大変可愛らしくて、そういう物を使って小さい子どもたちに食育が広まって行くのも良いのではないかと思います。

それと、厚生省としては食の安全の推進という部分で、食の安全に関するリスコミの実施という部分で取組が挙げられていますけれども、先ほどのテーマでもよく出ていましたけれども、高校生に対し情報提供をするのは難しいなと思います。我々もリスコミとか、そういうものを開催しているのですが、わりと年配の方が主に出席されていて、その中でいろいろと御意見を述べられているという状況です。かといって、果たして高校生が情報難民かということ情報難民ではない。当然インターネットを活用してどんどん情報を自ら取り込んでいるという部分がありますので、やはり高校生が楽しめるような、先ほども出ましたようなホームページを作り、その中で興味のある情報を的確に発信していくという部分が今後面白いのではないかと思います。以上です。

議長（平本会長）

ありがとうございました。ちょっと時間が過ぎてしまい申し訳ありません。このテーマについては、いろいろ御意見をいただきまして、この世代の厳しい課題というのを皆でちゃんと実感することと、いろいろと課題はあるのですが、何名かの委員に出していただいたように、関心のある人たちも居るのだと。まずはその人たちをうまく拾い上げて何か組織化しながらいろいろなことをしていく中で全体の底上げというのを狙うということも出来そうな気がしますので、これから少しこれを進めて行ったら良いのではないかと思います。時間がかかり過ぎてしまい申し訳ありません。事務局にお返しします。

事務局（健康推進課 日地谷主幹）

その他のところで1件だけ御報告いたします。お手元に配布いたしております、参考資料1を御覧願います。市町村の食育推進計画の策定状況についてまとめております。

3月17日時点で調査したところ、策定済みの市町村数は、13市町、全体の36.1%となっております。現在策定中の市町村は、8市町で、全体の22.2%となっておりますが、策定予定時期が21年3月となっております市町につきましては、年度内に策定が完了する方向で作業を進めているということですので、4月1日現在では、全体の50%に当たる18市町で策定済みとなる予定です。

なお、策定予定なしの南三陸町につきましては、今年9月に気仙沼市との配置分合が行われることから、単独での計画策定は見送ることとしたものです。以上です。

司会（健康推進課：横山技術補佐）

平本会長、ありがとうございました。委員の皆様にも、長時間にわたり御協議いただきありがとうございました。

これで、平成20年度第2回目の宮城県食育推進会議を終了致します。ありがとうございました

いました。